

「これ(は/φ)もう～」の無助詞成立の要因について

清水由貴子

1. はじめに

本稿は無助詞研究の一環として「これ(は/φ)もう～」における、無助詞成立の要因を探ることを目的とする。具体的には「これ(は/φ)もう～」という表現が、どのような場合に「は」になり、どのような場合に無助詞(「φ」)になるのかについて分析する。

本稿が「これ(は/φ)もう～」に着目する理由は、「もう」の介在によって「これφ」と「これは」の違いが分析しやすくなるからである。(1)は「は」も「φ」も使える例、(2)は「は」しか使えない例である。

- (1) SS2: あっ、これがね、かさこ地蔵のテキスト。(あー、ありがとう)これ(は/φ)もう終わったから持ってっていいよ。
KY2: これ、いつまで借りていいの？
SS2: もう、それに戻ってやるってことないから、うーん。
KY2: お正月。
SS2: あー、大丈夫。2月ぐらいまで大丈夫だと思う。 [名大会話]
- (2) OM1: 短い論文書くと、その、背景を説明するのでスペースを取られてしまって。
ST1: そうですね。
OM1: 肝心なところまで行き着かないんですよ。
ST1: あー。
OM1: だからこれ(は/*φ)もう語用論学会とか、そういう専門家が集まるところじゃないと無理だって。 [名大会話]

¹ 平成13年度～15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」(研究課題番号:13480069、代表:大曾美恵子)の一環として作られた日本語母語話者による雑談会話データ。

清水由貴子

野田(1996)などの指摘にもあるように、一般に「 ϕ 」が成立しやすいのは「話の現場に存在するものを指す名詞」(野田(1996:269))の場合である。これに従うと、(1)の「これ」は話の現場に存在する「テキスト」を指しており、現場指示であるため「 ϕ 」が成立しやすいと考えられる。これに対し(2)の「これ」は「論文を枚数制限内で書けそうもない状況」という前の文脈を指しており、文脈指示であるため「 ϕ 」が成立しにくいと説明できる。

本稿では、(1)(2)における「これ(は/ ϕ)もう～」の違いについて見ていく。

2. 先行研究

無助詞に関する先行研究では、名詞が対話の現場に存在する具体的な事物を示している場合は無助詞になりやすく、指示詞で示されることが多いことが指摘されている。(筒井(1984)、長谷川(1993)、大谷(1995)、野田(1996)、姫野(1999)他)

(3) [客におかしをすすめながら] これ ϕ どうぞ。² (長谷川(1993))

(4) これ ϕ ガスのにおいだよ。 (筒井(1984))

さらに大谷(1995)や姫野(1999)は、対話の現場に存在する事物のうち、まだ対話に登場していない事物を相手の前に提示する場合は、「は」よりも「 ϕ 」が自然であるとしている。³

(5) まるこ: はまじー
はまじ: なんだよー
まるこ: これ ϕ あげる。南の島のおみやげ。 (大谷(1995))

(6) [プレゼントを差し出しながら]
これ ϕ 使っていただけると嬉しいんですが。 (姫野(1999))

一方、名詞が対話の現場にない事物を指している場合でも、文脈または発話状況から推論できれば無助詞になると指摘されている。(筒井(1984)、丹羽(1989)他)

(7) [食事の後に] ステーキ ϕ おいしかった？ (筒井(1984))

(8) こんな話 ϕ もうようよ。 (筒井(1984))

² 無助詞名詞句と「 ϕ 」マークに下線を引いた形式で統一するために、長谷川(1993)、筒井(1984)、大谷(1995)、姫野(1999)、丹羽(2006)の引用の形式を一部改めた箇所がある。

³ 大谷(1995)は、すでに対話に登場している事物ならば「 ϕ 」も「は」も自然になるとしている。

(例) [お金を借りた後、しばらく話をした後で]じゃ、これ(ϕ /は)、ありがたうお借りします。

丹羽(2006)は、無助詞が持つ「題目提示」機能に注目し、「無助詞は新たに題目を立てる場合に現れやすく、これに対して「は」は新題目には用いられにくい」(丹羽(2006:299))と述べている。ただし、丹羽(2006)も指摘している通り、以下のような「新題目か否か」では説明できない例もあるとしている。

- (9) 山田さんの今度の論文、面白いね。
——うん。確かにあれ(は/?φ)面白かった。⁴ (丹羽(2006))
- (10) 財布を落としたんです。
——それ(は/?φ)さぞお困りでしょう。 (丹羽(2006))
- (11) こいつ(は/?φ)参ったな。 (丹羽(2006))

これにより、丹羽(2006)は(9)のように詞は先行文の題述関係の内容をそのまま引き継ぐような場合や、(10)、(11)のように「は」の表す対比性を持たない場合⁵には無助詞が不自然になると説明している。

以上のように、先行研究では「φ」の成立には名詞が現場指示であるか、あるいは新題目であるかということが関わっていることが指摘されてきた。以下、「これ(は/φ)もう～」において「φ」が成立する要因について探る。

3. 考察

3.1. 「もう」の意味

飛田・浅田(1994)は、「もう」の用法として以下の5つを挙げている。

< 限度を越えている様子を表す用法 >

「おかわりどう?」「もう十分いただきました」

< 目標に到達しようとする様子を表す用法 >

もうまもなく暖かくなるだろう。

< 現在の状態にさらに付け加える様子を表す用法 >

この仕事が完成するにはもう三か月はかかる。

⁴ 「は」「φ」の適性判断は丹羽(2006)による。(10)、(11)も同様。

⁵ 丹羽(2006)は(10)、(11)について「は」のある形で慣用化していると述べている。

清水由貴子

<感情があふれて処理できない様子を表す用法>

昨日はそりゃもうものすごい雨でひどかった。

<非難・叱責する気持ちを表す用法>

[デートに遅刻した]「ごめんごめん」「もう！」

吉田(1999)は、中国語話者の「もう」の誤用について分析した論文の中で、日本語の「もう」は時間以外に数量や程度といった別領域でのメタファーが可能であるため、各用法は独立したものではなく、意味的に関連があるものであることを論じている。以下に、吉田の言うメタファー的用法の例を挙げる。(例文は吉田(1999)より)

時間領域から数量領域への移行: だいぶ使ってしまった、もう1つしかない。
時間領域かつ数量領域へのメタファー: たくさん食べたから、もう食べたくない。
数量領域へのメタファー: 背がもう5センチ高かったらいいのに。
程度領域へのメタファー: 3時だ。彼はもう来るだろう。

さらに吉田(1999)は、「限度を越えたことに対する感慨・驚き」を表す間投詞的用法を以下に挙げ、この例から「程度領域における「もう」が情意副詞へと容易に転じ得る」(吉田(1999:64))と述べている。

間投詞用法: 大学に合格したんで、もう、うれしくて、うれしくて。
あなたって人は、ほんとにもうしょうがない！

以上のように、「もう」には様々な用法があるが、飛田・浅田(1994)も吉田(1999)も、これらの「もう」が時間・数量・程度の限界を越えたことを表す点で意味的につながっていることについては詳しく論じていない。本稿は吉田(1999)の指摘を受け、「もう」の副詞用法と間投詞用法が意味的につながっているものとする。

そこで次に(1)(2)に挙げたような2つの「これ(は/φ)もう～」の「もう」の意味について考える。まず、(12)(13)に、「これ(は/φ)もう～」において「は」も「φ」も使える例を挙げる。

(12) (= (1)再掲)

SS2: あっ、これがね、かさこ地蔵のテキスト。(あー、ありがとう)これ(は/φ)もう
終わったから持ってっていいよ。

KY2: これ、いつまで借りてていいの？

SS2: もう、それに戻ってやるってことないから、うーん。

KY2: お正月。

「これ(は/φ)もう～」の無助詞成立の要因について

SS2: あー、大丈夫。2月ぐらいまで大丈夫だと思う。 [名大会話]

(13) TM1: コンプリっていうのがなくて、代わりに論文を2つ書くの。それがMA論文であり、コンプリヘンシブの試験の代わりにする。それでねー、1本目出したのよ、3年目に。したらね、あの一、スプリットしちゃって、2人が読んで。

OM1: 意見が分かれたの？

TM1: そう、そして3人目に行ってその人が落したのね。なんとその人が一番買ってくれてる、主任教授じゃないけど、結局はあれですね。アメリカっていうのはそうやってこう、ま、変な言い方すると見込みがあるっていうか、ものを育てるといふか、そのために。だってね、これ(は/φ)もうちょっとていねいに手直したらパブリッシュできるって言われた。

OM1: はーん。直せと。

TM1: 直せ。だからもう半年。

OM1: いい意味で。落されたんだ。 [名大会話]

上記の例文における「もう」は、(12)は「もう終わった」、(13)は「もうちょっと」のように後ろの要素にかかる副詞用法の「もう」である。このような「もう」は、限界の時間、数量、程度を越えたことを表す。(12)は「終わった時間」という限界の時間を越えていること、(13)は「ちょっと」という限界の程度を越えることを表している。

次に、「これ(は/φ)もう～」において「は」は使えるが、「φ」は使えない例を挙げる。

(14) (=2)再掲)

OM1: 短い論文書くと、その、背景を説明するのでスペースを取られてしまっ
て。

ST1: そうですよ。

OM1: 肝心なところまで行き着かないんですよ。

ST1: あー。

OM1: だからこれ(は/*φ)もう語用論学会とか、そういう専門家が集まるところじ
ゃないと無理だって。 [名大会話]

(14)の「もう」は、吉田(1999)の言う「限度を越えたことに対する感慨・驚き」といった感情を表すという点で間投詞と共通する働きをしている。(14)は、論文の長さ「限界」が存在し、

清水由貴子

その「限界」を越えた長い論文では投稿が無理である、ということを述べている。しかし、「もう」の後に来る非修飾語は特定できず、「これはもう」でひとまとまりの連語となっている。

以上のことから、(12)～(14)の「もう」は、限界(時間・数量・程度)を越えたことを表す点で意味的につながっていることがわかる。それにもかかわらず、(12)(13)と(14)では、「これ(は/φ)もう～」の「は」と「φ」の許容度に違いがある。以下、(12)(13)は「これはもう～」も「これφもう～」も可能であるのに対し、(14)は「これはもう～」は可能であるが「これφもう～」は言えない理由について考える。

3.2. 「は」も「φ」も使える場合

まず、「これはもう～」が「φ」になる場合を見る。(15)では「もう終わった」、(16)では「もういい(食べない)」、(17)では「もうちょっと(ていねいに直す)」というつながりになる。ここで「これはもう～」は主題部分の「これは」の部分と題述部分の「もう～」の部分にわかれる。

(15) (=1)再掲

SS2: あっ、これがね、かさこ地蔵のテキスト。(あー、ありがとう)これ(は/φ)もう
終わったから持ってっていいよ。

KY2: これ、いつまで借りてていいの？

SS2: もう、それに戻ってやるってことないから、うーん。

KY2: お正月。

SS2: あー、大丈夫。2月ぐらいまで大丈夫だと思う。 [名大会話]

(16) [食べ物が残っている皿をさげようとして]

IT1: これ(は/φ)もういいの？

OM1: もういい。

IT1: あ、うん、また冷蔵庫入れてさ、(うん)食べれば、もうちょっと。 [名大会話]

(17) (=13)再掲

TM1: コンプリっていうのがなくて、代わりに論文を2つ書くの。それがMA論文であり、コンプリヘンシブの試験の代わりにする。それでねー、1本目出したのよ、3年目に。そしたらね、あの一、スプリットしちゃって、2人が読んで。

OM1: 意見が分かれたの？

TM1: そう、そして3人目に行ってその人が落したのね。なんとその人が一番買ってくれてる、主任教授じゃないけど、結局はあれですね。アメリカっていうのはそうやってこう、ま、変な言い方すると見込みがあるっていうか、ものを育てるといふか、そのために。だってね、これ(は/φ)もうちょっとていねいに手直したらパブリッシュできるって言われた。

OM1: は一ん。直せと。

TM1: 直せ。だからもう半年。

OM1: いい意味で。落されたんだ。 [名大会話]

(15)の「もう」は、「終わる」という動作の完了時点を限界とし、その限界を越えたこと、(16)は「お腹がいっぱい」という状態を限界とし、その限界を越えたこと、あるいは「食事の時間」を限界とし、その限界を越えたこと、(17)は「ちょっと(ていねいに直す)」という程度を限界とし、その限界を越えることを表す。

また、(15)～(17)の「これ」は眼前にあるもの、あるいは眼前にあったものを指す。すなわち、(15)は「テキスト」、(16)は「食べ物」、(17)は「論文」を指している。先行研究で眼前描写文では無助詞が可能であると指摘されているように、(15)～(17)が「これはもう～」でも「これφもう～」でも可能なのは、「これ」が指すものが眼前のものであるためである、と考えられる。

3.3. 「は」は使えるが「φ」は使えない場合

次に、「これはもう～」が「φ」にならない場合を見る。(18)～(20)では、「もう」が後の要素にはかからず、「これはもう」というまとまった連語になっている。(18)～(20)の「これ」は、前の文脈までの状況を指す。すなわち、(18)では「論文を枚数制限内で書けそうもない状況」、(19)では「運勢を変えるにはお払いに200万かかること」、(20)では「年齢が上がればしわができること」を指す。一方、(21)の「これ」は前の文脈に登場した人物(寅次郎)を指している。したがって、(18)～(21)における「これ」は文脈指示であると考えられる。

(18) (=2)再掲)

OM1: 短い論文書くと、その、背景を説明するのでスペースを取られてしまつて。

ST1: そうですよ。

OM1: 肝心なところまで行き着かないんですよ。

清水由貴子

ST1: あー。

OM1: だからこれ(は/*φ)もう語用論学会とか、そういう専門家が集まる場所じゃないと無理だって。 [名大会話]

(19) TY3: もう、帰ってきてもう、でわたしね、あの、占い師にね。

OM1: 占い師、また。<笑い>

TY3: 占ってもらったらね。(うん)あなたは(うん)あの一先祖がじよ、の、が、女性を泣かしてるからね、あの、跡継ぎが大体できない家系にあるゆうわけ。そんなちよっと待って、どうゆうことや。あなた、あの、男の子がいないでしょゆうから、いない言うて。女の子がいたとしても数いないはずやあって。そうや1人しかいない。そういう家系にありますよ言うわけ。ほんでそのときにまあ、とりあえずばかな思ってね、で、どうしたらいいの治すの、それを方向変えるのは言うたら、いやあ200万円ぐらい掛かるいうて。これ(は/*φ)もうインチキだな思ってやめたんだけど。 [名大会話]

(20) TY3: 今の、い、今の方がね、あのときの写真よりはイメージある。

FT1: そーお? <笑い>

TY3: もうあのね、確かに、あの、年齢が上がればしわもできるしね。これ(は/*φ)もう隠しようがないですよ。 [名大会話]

(21) [寅次郎の妹であるさくらの結婚式で、仲人がスピーチをする]

仲人: (前略)えー、兄さんの寅次郎君とちがってさくらさんは子供の頃からおとなしい、心の優しい子供だった。(中略)それに引きかえ寅次郎君のほうといいますと、これ(は/*φ)もう実に困ったものでありまして。

寅次郎: バカヤロー、何を笑ってやがんでえ。何も俺を引き合いに出すことはねえやな。 [寅]⁶

(18)の「これ」は、「論文を枚数制限内で書けそうもない状況」という前の文脈を指す。ここでは、論文が長いと投稿は無理で、短い論文なら投稿が可能だ、という意味を含んでいる。ここから「論文の長さ」というスケールが生じる。(図1を参照)

⁶ 日本語教育支援システム(通称 CASTEL/J:Computer Assisted System for TEaching & Learning/Japanese)のCD-ROMに収録されている『男はつらいよ』シリーズ(松竹株式会社制作)のシナリオスクリーンデータ。

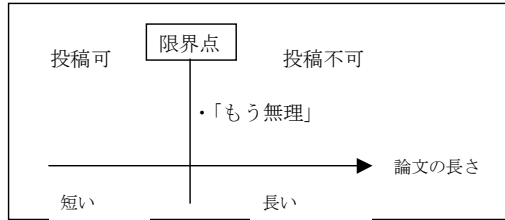


図1 (18)の「もう」の位置

このスケールのうち、ある点を越えると投稿の可否が変わってくる。そこに限界点が生じる。「もう」はこの限界点と関係する。つまり、この文では論文の長さによって投稿の可否が生じ、それを対比しているのである。

同様に(19)は、ある金額を境にインチキか、インチキではないかが、(20)はある年齢を境にしわを隠せるか、隠せないかが区別され、その境目が限界点となる。(21)はある点を境にしてその人が困った人か困った人でないかが区別され、「もう」はその限界点を越えたことを表し、そこに対比が生じるのである。

以上のことから、(18)～(21)はある基準を境に「これ」の位置する領域と、そうでない領域の2つを対比した文であることが分かる。したがって、(18)～(21)の文には、対比の意味があると言える。これは「もう」の存在によるものである。なぜなら「もう」の持つ「限界を越える」という意味には、「限界を越えた状態」と「まだ限界を越えていない状態」というスケールがあり、そこを対比させているからである。「これはもう～」という連語は、「これ」以外だったらよかった、ということと対比させて、「これ」がある限界を越えてしまったため「残念だ」「疑わしい」「諦め」の気持ちを表している。

(18)～(21)において、もし「もう」がなければ、(18)は「この論文を読んでもらうには、語用論学会等の専門家が集まる場所でなければならない」、(19)は「運勢を変えるために200万もかかるのはインチキである」、(20)は「年齢が上がればしわができることは当然で、それは隠しようがないことである」、(21)は「さくらは子供の頃からおとなしく、心の優しい子だったが、兄の寅次郎はそうではなかった」と解釈され、スケールや限界点の意味が生じない。

また、一般的に対比場面では「は」を使う。

(22) 酒(は/*φ)飲むが、たばこ(は/*φ)吸わない。(姫野(1999))

(22)のような対比場面では「φ」は使われにくい。よって(18)～(21)では「は」は使えるが

清水由貴子

「 ϕ 」は使えない。

3.4. 現場指示なのに「 ϕ 」が使えない例

以下の(23)では、「これ」が眼前指示であるにも関わらず、「 ϕ 」は使えず「は」しか使えない。

(23) A: あら、なに画いてんの……見せて。

B: え、ダメ、ダメ。

A: 見せて。

B: ダメダメ……

A: 見せてよ……

B: これ(は/* ϕ)もう見せるもんじゃないから。 [寅]

(23)の「これはもう～」は、「もう」が後ろの要素「見せる」にかかり「もう見せる」というつながりにはならず、「これはもう」でひとまとまりになっている。したがって、前節(3. 3)の「これはもう～」と同じタイプであると考えられる。また、「これ」は眼前の対象である「絵」を指していることから、「 ϕ 」が使えるようであるが使えない。その理由は、(23)が対比の意味を持つからである。(図2を参照)

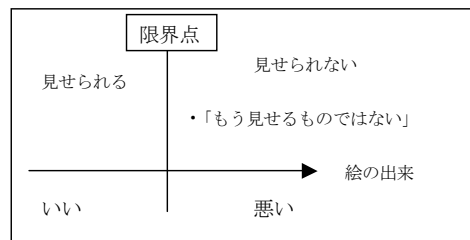


図2 (23)の「もう」の位置

(23)は、「もう」の存在によって「この絵は見せられない」と「他の絵は見せられる」というスケールを持ち、ある点を越えると見せられるか否かが変わる。そこに限界点が存在し、(23)では絵の出来によって見せられる、見せられないという区別が生じ、そこに対比の意味が出るのである。

(23)は(2)の「これはもう～」のタイプと同じで、かつ、眼前指示である。それなのに「 ϕ 」が

使えないのは、(23)の文が対比を表すからである。したがって、一般に「これ」が現場指示である場合は「φ」が使えるのに、「これ」が指すものに対比の意味があるという理由から、ここは「は」になるのである。

4. まとめ

本稿では、無助詞研究の一環として「これはもう～」について以下のことを明らかにした。

1. 連語の「これはもう」と「もう終わった」などの「もう」には「限界を越える」という意味的つながりがある。
2. 「これ(は/φ)もう～」において「は」も「φ」も使える場合：
「もう」が後の要素にかかり、かつ、「これ」が対話の現場にあるものを指している。
3. 「これ(は/φ)もう～」において「は」は使えるが「φ」は使えない場合：
「これはもう」でまとまった連語をなし、「これ」と対比されているものが存在する。
このよう場合は、「これ」が現場指示であっても「φ」にならない。

今後は、「それはもう～」「あれはもう～」についても研究していくと同時に、「これはまた～」などの表現についても検証したい。

参考文献

- 大谷博美(1995) 「ハとヲとφ一ヲ格の助詞の省略—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)』 pp. 62-66 くろしお出版
- 筒井通雄(1984) 「「ハ」の省略」『言語』 13-5 pp. 112-121 大修館書店
- 丹羽哲也(1989) 「無助詞格の機能—主題と格と語順—」『国語国文』 58-10 pp. 38-57 京都大学
- (2006) 『日本語の題目文』 和泉書院
- 野田尚史(1996) 『「は」と「が」』 くろしお出版
- 長谷川ユリ(1993) 「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』 80 pp. 158-168 日本語教育学会
- 飛田良文・浅田秀子(1994) 『現代副詞用法事典』 東京堂出版
- 姫野伴子(1999) 「無助詞」新屋映子・守屋三千代・姫野伴子編『日本語教科書の落とし穴』 pp. 76-83 アルク
- 吉田妙子(1999) 「副詞「もう」が呼び起こす情意性—中国語話者の「もう」の使用に於ける母語干渉—」『日本語教育』101 pp. 61-70 日本語教育学会